

[ 随想 ]

「16-17 世紀、海の世紀のイングランド」雑感

東京海洋大学 名誉教授 丹羽 隆子

The Sea and England in the 16th-17th Centuries

Takako NIWA

2008年8月27日、久しぶりにイギリスを訪れた。長年の夢がかないドーヴァー海峡をブローニュから初めて船で渡ったが、白亜の断崖が近づくにつれ、妙に懐かしいような不思議な感慨に襲われた。奇しくも紀元前55年8月26日、ローマの将軍カエサルもやはりブローニュから（と考えられている）、ブリタンニア征服を目指し初めてドーヴァーを渡ったのだ。未踏の地を前に、カエサルの脳裏を占めていたのは緻密な上陸作戦のみだったのだろうか。元老院への戦況報告のために記した『ガリア戦記』には、「商人は別として、やむを得ぬ理由もなしに、そこに立ち寄るような者は誰もいないし、商人といえども、ブリタンニアの海岸地方の、それもガリア地方に面している部分以外は、どこも知らない」（国原吉之助訳）とあるのみ、達意の文は間然するところがない。

しかし高村光太郎が、「海にして太古の民のおどろきを われふたたびす大空のもと」と歌ったように、天才軍人政治家カエサルの心中にも、地中海とはずいぶん異なる北の海を目の当たりにして、何らかの人間の情動が蠢いたとしてもおかしくない。19世紀の詩人マシュー・アーノルドの海を歌った最も美しく重要な詩とされる「ドーヴァー海岸」はつぎのように始まる。

海静かな今宵、  
潮は満ち、月が煌々と海峡を照らしている。  
フランスの海岸では淡い光が明滅し  
イングランドの絶壁はほのかに白く大きく、  
静かに湾を見下ろして、屹立している。(1-5行)

このあと詩人は深い思索へ沈潜していく。カエサルもこの詩と同じような月夜に出航——詩人はひょっとしたら「カエサルの初渡航」を脳裏に描きながらこの詩を書いたのかもしれない——ドーヴァーに達したのは翌朝9-10時だった。明けそめるにつれ、しだいに顕わになる白い断崖は朝日に映えて輝き、見たこともない巨大なオバケのように、美しく、静かに「遠来の客」<sup>1)</sup>を迎えただろうか。さらに近づき見上げれば、長く連なる丘の上には武装した敵の大群がびっしり陣取っていた。古代ギリシアは「タウマゼイン θαυμάζειν (驚嘆すること)」は哲学のはじまりと考えたが、カエサルの胸中去来した想念はいかなるものだったのだろうか。現在、高速フェリーでブローニュ・ドーヴァー間はわずか50分。あらぬ夢に耽っているうちに着いてしまった。

閑話休題。

ウィンストン・チャーチルは、大英帝国の歴史はカエサルがドーヴァー海峡を渡ったときから始まった、と言った (*A History of the English People* Vol.1)。カエサル以後イングランドは5世紀半ばまでローマ帝国の支配下に。その後大陸から渡来したゲルマン民族の大移動を経て、8世紀末北方ヴァイキングは北のノーサンバーランド州リンデスファーンから上陸襲撃したが、1066年征服王ウィリアムによる Norman Conquest も、英仏間の百年戦争もこの海峡から始まった。なにより1588年、イングランド海軍はこのドーヴァー海峡で、大航海時代をリードした海洋大国スペインの無敵艦隊を打ち破った。海峡によって大陸から隔てられた一島国にすぎなかったイングランドは、以後、ヨーロッパの一大強国へと飛躍、海外に雄飛し、植民地拡大戦略をもとに、しだいに七つの海を制する海洋帝国へと発展していく。この16-17世紀、国家権力が強化され、軍事が高度化され、経済が飛躍的に発展する時代のイングランドの歴史的・政治的背景はよく知られていよう。しかしその時代に伴走した、あるいは時代を牽引バックアップした「知の世界」についてはあまり知られていない。例えば天文学、応用数学、測量術を基礎に実践的学問として最も重視された航海術についてなど。その辺りの消息を、文化的側面からあれこれ、綴ってみたい。

1) ギリシア語では「客」も「敵」も「見知らぬ人」を意味する「クセノス ξένος」で表す。

嘯矢はイギリス経験主義哲学の創始者フランシス・ベーコン（1561-1626）。ベーコンはギリシア以来の伝統的な書物偏重の学問を否定、客観的観察と実験的方法による学問を主張してアリストテレス論理学の集大成『オルガノン（機関）』を批判、『ノブム・オルガヌム（新機関）』を著した。それは諸学問の近代化への道を開き、学問を志す人々の燈台となったが、1620年刊行の『ノブム・オルガヌム』を含む『大革新』の扉は、地中海の出口ジブラルタル海峡の両側にある「ヘラクレスの柱」を通して大西洋の海原へ出航していく船を意匠した図で飾られていた<sup>2)</sup>。つまりイングランドの近代化の舞台は大西洋であり、それを支えるのは近代的科学知の粹たる航海術であることを、象徴的、かつ具体的に明示したのである。

つぎは「悪貨は良貨を駆逐する」という経済学の法則で知られるイングランドの重商主義的財政家サー・トマス・グレシャム（1519-79）。ベーコンと同じケンブリッジ大学で学んだグレシャムは、商人や技術者や船乗りがラテン語でなく自国語の英語で、数学や天文学や地理学や測量術や航海術の理論や実践を学ぶことができる高等教育機関の創設を準備した。学校は1598年ロンドンに創設、教授陣には当代一流の学者が集まり<sup>3)</sup>、船乗りや商人や職人の子弟や、新興中産階級の出身者が学んだ。講義は無料だった。彼らの教育水準は飛躍的に向上、自然科学の担い手は船乗りや職人や商人となった。ラテン語で書かれた書物偏重のアカデミズムから、経験重視の実践的知へ。知の世界の大転換である。ロンドンは科学的知と文化的活力が横溢し、一般市民が知力をつけて自信を持ちいきいきと生きる近代都市となった。

あるいは、「等号＝」を発明して数学史に名が残るロバート・レコード（1510-58）。レコードはケンブリッジを出てロンドンで開業医をしながら、一般市民を対象に応用数学の講義をつづけ、『技芸の基礎』、『知識への道』など重要な教科書をすべて英語で出版、多くの読者を惹きつけた。また船乗りだったロバート・ノーマンは自らの経験をいかし、観測と実験に基づいた正確な伏角の測定法を、1581年『新しい引力』と題して英語で、綿密詳細に著した。ちなみにこの時代に英語で書かれた数学、測量術、航海術などに関する書物は30点以上あるという<sup>4)</sup>。航海術に関する書名をいくつか挙げれば、1574年『海への連隊』、1577年『完璧な航海術』、1579年『航海技術概論』、1581年『コンパスないし磁針の偏りについての論考』、1599年『航海術』など。ラテン語、スペイン語、オランダ語などから英語に翻訳されたものには1562年『磁石の性質とその効果』、1562年『航海に関するきわめて必要かつ有用な書物』、1578年『航海術の発見』、1599年『港湾発見術』、『航海における若干の誤謬』などなどがある。

さらに1570年、のちのロンドン市長ビリングスリーによって初めて英訳されたエウクレイデスの『原論』に、わざわざ「数学的序文」を寄せたジョン・ディー（1527-1608）も忘れてはならない。ディーはその「序文」のなかで「ラテン語を知らない人たち、そして大学の学者でない人たち<sup>5)</sup>」に呼びかけ、建築学から図像学まであらゆる技術における数学の重要性を強調、強烈なインパクトを与えた。数学者、天文学者、物理学者、古典学者にして王室海軍顧問、さらに魔術も使うといわれた博識万能者ディーは、無敵艦隊撃破を成功させた知恵袋でもあり、科学的技芸の典型たる航海術の改良発展にも貢献し、船乗りの技術教育に情熱を注いだのだった。

このように16-17世紀イングランドは科学的実学の重要性和有用性が発見され、第一級の学者たちが一般市民を対象にその教育を力強く推進した時代だった。ラテン語でスコラ哲学を学ぶオックスフォードやケンブリッジのアカデミズムとは別に、都市ロンドンが実践的科学の中心となり、船乗りや商人など新興市民層がその担い手となった世紀だった。言い換えれば16-17世紀は、新しい知が英国の近代を海に向かってダイナミックに切り開き、国力を増進させ、国家に繁栄をもたらし、ナショナリズムを高揚させた「海の世紀」だった。そしてその「海の世紀」を開き、先導、支えた新しい知こそ科学的航海術だった。かくして探検と征服の野望と漲る自負を胸に、知的技量に優れた船乗りが「タウマゼイン（驚嘆）」しながら大西洋に乗りだし、彼らが話す英語が、アメリカからカナダ、オーストラリア、インド、南アフリカへと移植され定着、根づいていく。

2) 山本義隆『磁力と重力の発見 2』、「11 章大航海時代と偏角の発見」、みすず書房、2003年、387頁参照。本著は「磁力の発見」がいかに人知を啓いたかを、また本章は「偏角の発見」がいかに航海術を発展させたかを詳述する。古今の文献を渉猟し深い洞察のもと論理的に再構築された壮大な知の世界は示唆深く、本稿もフランシス・ベーコンからジョン・ディーまでの記述は、本書に多くを負っていることを謝意を込めて記す。なお「ヘラクレスの柱」は以下のようなギリシア神話に由来する。怪力無比の英雄ヘラクレスは「十二の難行」の一つを成就するためアトラス山に登らなければならなかったが、近道をしようと山を真二つに打ち砕いた。結果、地中海は大西洋とジブラルタル海峡でつながり、二つの山は「ヘラクレスの柱」と呼ばれるようになった。古代地中海世界ではジブラルタル海峡を出ることは地球の外へ出ることを意味した。

3) 例えば、航海術にも造詣が深く科学的航海術の書物も著し、独自に対数を発見した初代幾何学教授ヘンリー・ブリッグズ。1620年に常用対数の計算尺を考案した第3代天文学教授エドモンド・ガンター。偏角の永年変化を発見した第4代天文学教授ヘンリー・ジェリブランド。「フックの法則」で知られる物理学者ロバート・フック、セント・ポール大聖堂などで知られる建築家クリストファ・レンなどなどがいた。学校は1660年「物理・数学・実験的学習を推進する大学」グレシャム・コレッジとなり、同時にそこに英国科学アカデミーである英国王立協会も設立されて今日に至る。山本義隆『磁力と重力の発見 3』821-22頁参照。なお16-17世紀はイタリアのガリレオ・ガリレイ、ドイツのヨハネス・ケプラー、イギリスのアイザック・ニュートンが活躍した「天文学の世紀」でもあった。

4) 山本義隆『磁力と重力の発見 2』441-442頁参照。

5) 山本義隆『一六世紀文化革命』みすず書房、2007年、522頁。

時まさにイギリス・ルネサンスの盛期でもあった。文芸の世界でもホメロスやウェルギリウスやオウィディウスの叙事詩や、セネカの悲劇や、プルタルコス<sup>1</sup>の歴史などギリシア・ローマの古典が英語に翻訳出版され、先のベーコンをはじめ、エドモンド・スペンサー、フィリップ・シドニー、クリストファー・マーロー、トマス・キッド、ロバート・グリーンなどオックスフォード、ケンブリッジ出身の「大学才人」が輩出した。あるいは典型的なルネサンス型教養人ウォルター・ローリーもいた。一方には、詩人にして劇作家シェイクスピアが、そしてベン・ジョンソンがいた。彼らは「大学才人」ではなかったが、聖書劇や道徳劇が中心だった伝統的演劇を一新させ、王や貴族や、商人や職人や軍人など一般市民を主人公にした人間劇を創作、上演した。そしてそれらを王も貴族も、一般市民も、みんなが楽しんだ。演劇熱は沸騰し、ロンドンには多くの劇場が建設された。古代ギリシアについて、世界演劇史のもう一つの原点といわれる16-17世紀エリザベス朝「演劇の時代」の到来である。ギリシア・ローマの文化文芸ならびに人間性の回復と解放を唱道するルネサンス運動はエリザベス朝演劇で一つの大きな結実を見た。いみじくもシェイクスピアの活動拠点の劇場はThe Globe「地球座」。そこで彼はイングランド人、デンマーク人、スコットランド人、イタリア人、ギリシア人、ユダヤ人、ムーア人などなど人種や民族の差を超え、普遍的な人間を描いた。舞台は世界、国境のない地球だった。

そのシェイクスピア、じつは船乗りだった、とする説がある。船や海に関する専門用語が諸作品の随所に散りばめられているばかりか、知識は正確無比、比喩は適切至妙、使い方は自由闊達。これは「ただの陸者 a mere landlubber」にできる芸当ではない。彼の生涯のうち記録が残っていない空白の数年間、彼は船に乗っていたにちがいない<sup>2</sup>、というのである。たしかにシェイクスピア作品には、海や船や航海関連の用語や比喩や挿話が多様に多用されている。例えば最初の上演作品(1590-92年頃)と考えられる『ヘンリー六世』に一例をとってみよう。ヘンリー六世に望まれフランスから嫁いだ才気縦横な王妃マーガレットは、赤薔薇のランカスター家と白薔薇のヨーク家の内紛時、援軍を求めて一時期故国フランスに逃れ、ふたたび海峡を渡りヨーク家と一戦を交える。場面は王妃が味方の貴族や兵士を激励、鼓舞して一気に語る場面。大歴史ドラマの第三部5幕4場、海とは全く関係ないコンテキストである。少々長いが引いてみる。

諸卿、賢者はいたずらに座して損失を嘆かず、いかにして損害を回復するか前向きに考えるものです。

たとえマストが吹き倒されて船縁から海に落ち、太綱が引きちぎられて頼みの錨を失い、乗組の大半が波に飲まれようと、それがなんです。

パイロットはまだ生きていますではありませんか。

そのパイロットが舵を捨て、臆病な子どものように涙を流し、ただでさえ有り余っている海の水をさらに増やすようなまねをしていいものではないでしょうか？

そのように嘆いていたら船は暗礁で砕かれるでしょう、

勇気と努力をもってすれば救えるはずを。

ああ、なんて恥ずかしい、あやまった態度でしょう！

ウォリックが錨であったとしても、それがなんです？

モンタギューがマストであったとしても、それがなんです？

殺された味方が太綱であったとしても、それがなんです？

オックスフォードが第二の錨になればいいではありませんか？

サマセットが第二のマストになればいいではありませんか？

フランス軍が太綱や索具になればいいではありませんか？

そして未熟ながらこのたびは、エドワードと私が熟練したパイロット役をつとめればいいではありませんか？

私たちは舵を捨て、いたずらに座して嘆きはしません。

たとえ荒れ狂う風が否と言おうと、難破させようとする浅瀬や暗礁を避け、船を進めて行くつもりです。

荒波にはおとなしく話しかけてもむだ、叱りつければいい。

そしてエドワードは残忍な海でなくてなんです？

クラレンスは人をだます流砂でなくてなんです？

リチャードはごつごつした岩でなくてなんです？

すべて私たちあわれな船にとって仇敵なのです。

海を泳ぐとしても—ああ、それはわずかなあいだけ。

砂の上に立つとしても—たちまち沈んでしまうだけ。

岩にすぎるとしても—波に洗い流されてしまうか、飢え死にするだけ、それは三重に死ぬことでしかない。

6) W. B. Whall, *Shakespeare's Sea Terms Explained*, London, 1910, pp.5-6. あるいはシェイクスピアに海事関連の用語や表現が多いことについては、A. F. Falconer, *A Glossary of Shakespeare's Sea and Naval Terms including Gunnery*, London, 1965 もある。

こんなことを言うのも諸卿にわかっていただくためです。

たとえどなたか、私たちのもとから逃げ出したとしても、残忍な波や、人をだます砂や、恐ろしい岩以上の慈悲をあの三兄弟に期待したってむだだ、ということ。

ですから、勇気をお出しなさい！ 避けられぬことを嘆いたり恐れたりするのは、子どもらしい女々しさです。

(小田島雄志訳。ただし改行など若干変更した)

なるほどまるで海洋小説である。しかしシェイクスピアの時代、海はいわば「社会現象」だった。海や航海は政治的、軍事的、文化的「日常」であり、同時に「憧憬」だった。経験豊かな船乗りや元船乗りや漁師や、海をよく知る商人や船主などは身近な隣人だった。海や航海に関する情報源は周囲に溢れていただろう。その気になれば、いっばしのプロフェッショナルな情報通になれたにちがいない。そして読者も観客も海や航海についてのプロ級の知識を期待し、理解し、楽しんでにちがいない。シェイクスピアは船乗りであったか否か、真偽の程は定かでない。俳人で水彩画も物した夏目漱石は風景をじつに巧みにしばしば描写したが、シェイクスピアにとっての海は、漱石にとっての風景同様、人間を描くための必須の装置、不可避の背景だった。そう考えるのが一番自然のような気がする。

出版界も活況を呈した。1580年代にはオックスフォード、ケンブリッジ両大学に大学出版局が創設された。巷間では、英語で書かれた航海術や数学の書物が多数刊行されたことはすでに述べたが、読み物のベストセラーも出るようになった。1589年に出版されたリチャード・ハクルートの *The Principal Navigation, Voyages, Traffics, and Discoveries of the English Nation, made by Sea or over Land to The most remote and farthest distant Quarters of the Earth at any time within the compass of these 1500 years*、通称『ハクルート航海記』である。オックスフォード出身の牧師、外交官、地理学者そして歴史家のハクルートは祖国の新世界植民活動を積極的に支援し、同時に初期の航海者の事績にも深い関心を寄せて膨大な史料を収集、この大著を著した。『航海記』は版を重ね改訂されて今日に至る<sup>7)</sup>。イギリス海洋文学の系譜はこの『ハクルートの航海記』にはじまると言っていだろう。以後18世紀、小説の時代が到来すると、1719年には『ロビンソン・クルーソーの生涯と奇しくも驚くべき冒険』、1726年には『船医に始まり後に複数の船の船長となったレミュエル・ガリヴァーによる世界の僻地への旅行記4篇』、通称『ガリヴァーの冒険』などがつぎつぎと世に出た<sup>8)</sup>。

また16-17世紀は、国王や富裕者の出資をえた個人船が、国王の特免状を携えて合法的に外国船を拿捕、掠奪する私掠船の全盛期だった。イギリスの国庫歳入は私掠船からあがる膨大な利益によって潤沢にうるおった。スペインの無敵艦隊撃破時に副司令官を務めたフランシス・ドレークとその師匠格のホーキンズはのちに出身地プリマスの市長となり、さらに爵位も授与されたが、1580年に私掠船船長ドレークが出資者エリザベス女王に献上した利益は6000%を上回ったと言われている。あるいはキャプテン・キッドは1699年に哀れ絞首刑となったが、処刑される前、掠奪した財宝の山をどこかに隠したと伝わるため、ステューブンスンの『宝島』やエドガー・アラン・ポーの暗号推理小説『黄金虫』が描かれることになった。スタインバックの『黄金の盃』に描かれたカリブの海賊、のちにジャマイカ代理総督として強硬な海賊取締政策を領いたヘンリー・モーガンもいた。オックスフォード大学出身の詩人、歴史家でもあった廷臣ウォルター・ローリーは海洋探検家として新大陸にイングランド初の植民地を築いた功績も有名だが、たびたびの冒険航海でしばしば私掠船海賊に早変わりした。

海賊は粗暴、野蛮なアウトローである。しかしながら、一方、特異な徳義心や奇妙な正義感を持ち合わせ、夢と冒険、自由と解放、独特の詩情とロマンをかきたてる不思議な存在でもある。だからしばしば文学の主題になる。その最好例は1814年2月出たその日1日で13,000部を売り尽くしたというバイロン卿の叙事詩『海賊』であろう。描かれた孤独で憂鬱、剛毅果敢な精神と純潔一途な愛情の持ち主、エーゲ海、地中海の海賊コンラッドは、ロマンティックな海賊像を揺るぎなきものにした。

あるいは今夏訪れたグリニッジの海事博物館のショップには子供用コーナーが特設されていて、「海賊」に関する物語やコミックや、幼児向け絵本や、とりどりのステイショナリーやファンシーグッズ、Tシャツやハンカチ、スウィーツやビスケットが販売されていた。海賊は子どもたちの夢の「英雄」、いかにも明るく楽しげだった。バイロンの超弩級ベストセラーの影響もあるのだろう、海賊は魔法とともに少年少女の夢と想像力を育む「必須モチーフ」として定着しているようである。児童文学の古典『ピーター・パン』をはじめ、イギリスには海賊が登場する児童文学は多い。アーサー・ランサム

7) ハクルートの遺志を継いで1846年に設立された *The Hakluyt Society* は、創設以来、主として16-17世紀の「航海と探検と歴史」に関する世界中の第一次史料を英語で刊行している。その「ハクルート叢書」の *First series* は1899年までに100巻を刊行。 *Second series* は2000年までに190巻、そして現在 *Third series* と *Extra series* が続刊中。他に類のない第一級学術海洋史叢書である。

8) 以後1883年には海洋冒険小説の傑作『宝島』が、20世紀になると、海に抽象的意味をもたらした一連の作品を書いて有名な船員上りの小説家コンラッドが、同じく船員だった経験をいかして海への憧憬を高らかに歌い海の詩人とも称される桂冠詩人ジョン・メイスフィールドも登場。現在はあの提督ネルソンをモデルとするセシル・フォレスト著「ホーンブロウシリーズ」が人気を博しているようである。

『ツバメ号とアマゾン号』などはその代表だろう。4人きょうだい海賊ごっこをして楽しい夏休みを湖水地方で過ごす物語だが、海事用語や技術用語がふんだんに出てくる本格派海洋小説である。

ちなみに「海賊」の語彙も豊富である。一般には *pirate* だが、バイロンの『海賊』では *corsair*、『宝島』では *sea dog* や *gentleman of fortune* も使われている。あるいは私掠船船員（海賊）は *privateer*。カリブの海賊は *buccaneer*。その他 *sea vagrant*、*libertarian* もある。女海賊は *hell cat* ともいう。活動した時代や海域などで使い分けるようである。

翻って、同じ島国でありながら、わが国には海洋文学の伝統がない。「海賊」をモチーフにした海洋冒険物語の傑作がない……。しかし考えてみれば、片や、16-17 世紀「海の世紀」に、科学的航海術の発展を国家的ヘゲモニーとした国。18 世紀の産業革命をへて 19 世紀には七つの海を支配する海洋帝国となった国。そして「大海原を支配せよ」と歌う「ルール・ブリタニア」<sup>9)</sup> を国民歌として愛好する国である。片や、17-19 世紀まで鎖国政策（厳密な意味で「鎖国」ではなかったため、今日では専門家は「海禁政策」という用語を使うようだが）をとり、自国内で独自の豊かな市民文化を育んだ国。その間、日本文化は大きく花開き、社会秩序も成熟したのだった。単に *aggressive* と *defensive* のカードで二分することのできない、彼此の国と民族の精神的特質、文化的所産の相違に、あらためて「タウマゼイン（驚嘆）」しながら、想念はめぐる。

---

9) J. トムソンの詩「ルール・ブリタニア *Rule, Britannia*」に T. アーンが曲をつけた。1740 年の初演以来現在まで、イギリスで最も親しまれている愛国歌。「この世の初め、神の命により、海から生まれたイギリス。女神ブリタニアよ、大海原を支配せよ、われらは断じて、断じて、断じて、奴隷となることはない」と歌う。ブリタニアはイギリスを擬人化した女神。ギリシア神話の智恵と軍事の女神アテネの兜を被り、ユニオンジャックを描いた盾と、海神ポセイドンの象徴である三つ叉の矛をもつ姿で表象される。英国で毎夏開催されるクラシック音楽の大祭典 PROMS（120 年以上の伝統をもつ）の最終日に、国歌の前に、「イギリスの海の歌の幻想曲」とともに大合唱される定番でもある。

